武蔵野日曜集会 復活節

霊生活現

――マルコ伝第14章32～36節、第16章1～20節――

１９７７年４月10日
小池辰雄

地に平伏し　若しも得べくば　御意のままを成し給え　霊の力　義と愛のクロス　肉体が霊化
もうひとつ奥の世界　円現自在　キリストの霊生　霊生活現　使徒的信仰　キリストの活現

【マルコ14・32～36】

32彼らゲッセマネと名づくる処に到りし時、イエス弟子たちに言い給う『わが祈る間、ここに坐せよ』33斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴いゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、34『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり、汝ら此処に留りて目を覚しおれ』35少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言い給う、36『アバ父よ、父には能わぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給え。されど我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給え』

【マルコ16・1～20】

1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、2一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。3誰か我らの為に墓の入口より石を転ばすべきと語り合いしに、4目を挙ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。5墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。6若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦りて、此処に在さず。視よ、納めし処は此処なり。7然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言い給いしが如し」』8女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。

9一週の首の日の払暁、イエス甦りて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、前にイエスが七つの悪鬼を逐いいだし給いし女なり。10マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。11彼らイエスの活き給える事と、マリヤに見え給いし事とを聞けども信ぜざりき。

12此の後その中の二人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿に

て現れ給う。13此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なお信ぜざりき。
14其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固なるとを責め給う。15斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝えよ。16信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。17信ずる者には此等の徴、ともなわん。即ち我が名によりて悪鬼を逐いいだし、新しき言を語り、18蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。
19語り終えてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に坐し給う。20弟子たち出でて、遍く福音を宣伝え、主も亦ともに働き、伴うところの徴をもて、御言を確うし給えり。

●地に平伏し

「移りゆく世にも変わらで立てる」

という。月日は変わり人々は移りゆくというのですが、皆さんは、運命環境がどのように移り行っても変わらないで貫くということが極めて大事なことです。

復活節ですが、いきなり復活の話をするわけにいかない。常に申し上げているとおり、十字架を抜きにして復活は考えられない。この前の週は、

「十字架上の七つの言」

と題してお話しました。今日は、それは繰り返しませんけれども。しかしながら、キリストが十字架に向う前にもうひとつ大事な時があった。それはゲッセマネの祈りです。これはゲッセマネという園においてキリストが祈られた。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四つの福音書があります。マタイ、マルコ、ルカは共観福音書です。大体似たような書き方をしている。ヨハネ福音書というのはちょっと違う。

マタイは特にキリストの言の面が、マルコはキリストの行為面が、ルカはキリストの心の面が、ヨハネはキリストの霊の面が、特にその特色と考えられます。「言・行・心・霊」です。もちろん、霊はすべてに通じています。けれども、特にヨハネは霊的な書です。

今日は、そのマルコ伝の行のところです。マルコ伝14章32節から。

32**彼らゲッセマネと名づくる処に到りし時、イエス弟子たちに言い給う『わが祈る間、ここに坐せよ』33斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴いゆき、**

このゲッセマネの祈りで、ペテロとヤコブとヨハネと、この三人の弟子。これは一番キリストのじかじかのお弟子さんです。ゲッセマネの祈りの光景をいろいろな画家が書いて

います。ドイツの第一等の画家のデューラーが書いている絵は、私は非常に感銘深い。キリストが十字架の姿をして平伏して、倒れ伏して祈っている。この三人の弟子は少し離れた所で眠っている。弟子どもは、先生が血の汗の祈りをしているのに、眠ってしまっている。そのことが書いてある。

甚く(いた)驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、34**『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり、汝ら此処に留(とどま)りて目を覚しおれ』**

と言っているんですが、弟子たちは目を覚ましていない。我々は目が覚めたような顔しているけれども、心が眠っている場合が多い。ここの弟子は目も心も眠ってしまった。

35**少し進みゆきて、地に平伏し、**

「地に平伏し」

と書いてあるでしょ。マタイ伝も「平伏し」と書いてあります。ルカ伝では

「ひざまずき」

と書いてありますけれども。この平伏しというのが非常に大事です。

「神さまの前にぶっつぶれて」

ということです。

聖書の世界は、本当に平伏すまでは、この聖書の現実の前に、キリストの前に降参するまでは――無条件降伏です――この世界に入れない。御霊の力というものはありがたい。皆さんも、この福音を得たら、何をしても本当の力が入ってくる。皆さんは、男の方でも女の方でも、この本ものに捕まえられたら、もう恐いものはないです。そして、本当の伝道というのは一対一でやっていくことです。我々は、キリストに対するときは、一対一なんだから。そういうことで、いよいよ勇ましくお願いします。

キリストは地に平伏している。神さまの前にイエスは平伏しました。こういうのをいい加減に読んではダメです。これはドラマですから、それを読んだら、そのドラマの中のその人物に自分がなりなさい。それを身読(しんどく)、からだで読むということ。

「頭で読むのでも、心でも読むのでも、目で読むのでもない。身(からだ)で読むんだ」

と。さすがは、日蓮さんの言葉です。体当たりしてこれにぶつかる。

●若しも得べくば

若(も)しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言い給う、

「もうごめんです」

と、神さまの前にキリストは正直に人間の弱さをそのままそこでさらけだされた。イエスという人は神の子だから泰然自若としているかと思うと、そうではなかった。

34**わが心いたく憂いて死ぬばかりなり**

なんて。そして、

36 **『アバ父よ、**

と。「アバ」はアラミ語です。ヘブライ語のＡＢＣの「ＡＢ」が「アーブ」という。これが「父」という語で、「アッバー」というのは「父よ」という叫びになる。「アー」という発音は非常に大事な発音です。これは五十音のうちで最高の音ですから。阿吽（あうん）の呼吸というけれども。

父には能（あた）わぬ事なし、此の酒杯（さかずき）を我より取り去り給え。

「できたら、もう私はいきなりあなたのところへ行きたい。十字架になんかかかりたくありません」

と。これは本当ですよ。キリストはなにも十字架にかかる必要はない。彼は義人中の義人で、神さまの命令にこれ従った。キリスト教は一般に女々しいと思われているが、とんでもない。武士道以上の武士道なんだ。

キリストは神さまの前に平伏して、

「私はあなたのところへ行きたい」

と。キリストみたいな人は、血気の体がいきなり霊の体に変わる。霊生を持っている。私は今日の題に、「霊生活現」と書いた。こういう書き方は初めてした。霊の生命に化して、常に霊の生命が内在しているから。そうすると霊体に化して、いきなり天界に入ってしまう。神さまもそうしたいんだ、本当は。罪なき人だから。

「罪の価は死」

だけれども、キリストは罪がないから。罪を知っているけれども、キリストは犯さない。罪のいろんな状態をみんなキリストはご存じだ。けれども、それに負けないで、完全にそれに勝ってしまった。だから、霊体に化して天界へ行ってしまえる。

だけれども、

「ちょっと待て」

と、神さまの方は。あの旧約聖書で、当歳の傷なき羔羊（こひつじ）を大祭司が一年に一回、神殿の至聖所の前で屠って、罪の贖いの儀式をやった。これが旧約宗教の型なんです。その旧約宗教を今度はキリスト自身が羔羊となって、贖罪を、罪の贖いを、贖罪死をやった。これは極刑だからね。

「お前は贖罪死をとげよ、十字架で。すべての人の罪を負え」

と。罪を担う。負って、罪を贖ってしまう。

「罪びと」というのは、神さまの言うことをはっきり本当に聞けないということですよ。神さまに本当に従っているのを「義人」という。

アダム・イブがそれを犯した。神さまの言いつけを犯した。あれは神話ですよ。神話だけれども、あの神話の形をもってすごい真理が語られている。聖書を読みそこなってはこまる。聖書はいかなる範疇の本でもないですから。形態からいえば文学書みたいなものだけれども、文学でもない。

●御意のままを成し給え

キリストは羔（こひつじ）となり、キリスト自身が大祭司となって、十字架についた。ゴルゴタの丘の上の十字架が、ここが本当の至聖所なんです。二千年前のゴルゴタの丘は今も我々にとっては現実です。

「二千年前のキリストが架かった十字架の木はどうなっているか」

なんて、くだらないことを言う必要はない。それはもう腐ってしまっているに決まっている。

だから、パウロが言ったでしょ、

「われキリストと共に十字架せられたり。

と。私はキリストと一緒に十字架せられましたと。

われ生く、されどわれにあらず。キリストわがうちにありて生き給うなり」（ガラテヤ2・20）

「私は生きているけれども、もう私ではありません。キリストが私の中で生きていますよ」

と。そういう告白をする。そのキリストの贖いをパウロは百％に受けとった。始めはキリストを迫害していた悪いやつだったけれども。

されど我が意（こころ）のままを成さんとにあらず、御意（みこころ）のままを成し給え』」（マルコ14・32～36）

ゲッセマネの祈りで、

「私のこころではない。しかし、あなたの御意（みこころ）が成ってください」

と。「あなたの御意」すなわち「神さまの御意」は、

「お前は人の罪を負って、羔（こひつじ）となって十字架にかかれ」

と。これで決まった。キリストはそれをついに受けた。

「汝の御意を成してください。この私を通して」

と。「この私を通して」とは書いてないけれども、そういうことです。「御意をなさせたまえ」と言って、傍観しているのではない。

「この私を通して、どうぞやってください」

と。「御意をなさせたまえ」と言うね、汝の意思がなされるようにと。これが、

「私を通してなしてください」

ということ。これは、キリストは言わないけれども、こういう言葉が隠されている。それでキリストが十字架にかかった。彼は霊の力をもって、向ってくるやつをぶっ倒すこともできたんです。

●霊の力

この霊の力というのは凄いんですよ。日蓮が

「南無妙法蓮華経！」

と、龍の口でもって斬られる瞬間に称えれば、これを斬ろうとしたやつがぶっ倒れた。日蓮にかかっている仏の霊に撃たれた。もう歴史的にどうだこうだなんて言わなくたって、私は

「はいそのとおり」

と言いたい。そういうサタン的なものをやっつけるところのもの凄い義の力として働く。また、可哀相な人を、あるいは敵をもとかしてしまうような愛の力として働く。この御霊はどちらの働きもする。

愛の働きで素晴らしかったのがアッシジのフランシスです。フランシスがある町にやってきた。その町は狼が出てしょうがない。人食い狼です。ものは掠めるし人は食う。それで町の人は恐がっていた。そこにフランシスがやってきて、

「ああそうですか」

と。あんのじょう、狼がやってきた。フランシスは十字を切って、人食い狼に、

「兄弟、狼よ」

と言った。

「あんたはだいぶ悪いことをしたね。だけれども、これからはもうよそう。私はこの町の人に約束させる。あなたに食べ物をやるように約束するから、人は食わないでくれ。」

と、優しい響きで。

動物というのは、人間の言葉はわからないけれども、その人の心根、その風貌、その響きでそれは直覚できるんです。動物は、本当に愛する人のところには、言葉の奥の世界の響きがわかる。動物の五感というのは凄いからね。狼に「兄弟よ」と言って手を出したら、向うも前足を出して握手した。これは本当のはなし。それでその町は助かったという。フランシスというのは、小鳥も集まってくるし、狼もなついてしまう。獅子や虎に対しても「南無妙法蓮華経」「南無阿弥陀仏」でもって難を逃れた話もある。

とにかく、今の人間は非常に魂の世界がお留守になってしまった。魂の大事な世界が。肉体は空気を吸っているけれども、魂が霊気を吸ってない。だから、みんなおかしくなる。

病気というのは気が病んでいる。「病体」とはいわない。「病気」という言葉は素晴らしい言葉です。もともと気が病んでいる。

「元気を出せ」

という。宇宙の大元の気です、元気というのは。大元の気をいただかないで、「元気を出せ」なんて言っても、それは空元気だよな。

小学校から大学に至るまで、先生方は惜しいなと私は思う。教育者がこの世界をほとんどご存じないから。それでは本当の教育はできない。だから、大事な魂がみんなそこなわ

れてしまう。やれ日教組だ何だと、労働者意識ですぐストライキだなんて。ドイツ人も言っていましたよ、

「ドイツではもうストライキなんてありません、合理的に話し合って折り合います」

と。もう恥ずかしいです、正直。こんなことやって悪循環で。誰が物価を高くしているんですか。我々市民のその心がそうしている。経済の問題も本当は心の問題なんです。

●義と愛のクロス

キリストはついにゲッセマネの祈りで十字架につかれた。この十字架をもって贖罪の死を遂げられた。贖罪死、贖罪愛です。キリストの十字架上の七つの言葉がある。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と、イエスは叫んだ。

「なぜ、私をお棄てになるか。あなたに百％に従ってきたではないですか。その私をなぜお棄てになるか」

と。ゲッセマネの祈りで、既にはっきり、全存在でもってキリストは神さまの御意を受けとっていながら、なぜ、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と叫んだか。これは、天地を貫く神の義のために、義を叫んでいるんです。

「神の御意を行なうというこの実存の線が破られてたまるか。不合理なことこれにまさるものはない。神の子が十字架にかかるとは何事だ」

というわけです。この義の叫びです。もう一つは、

「彼らはなすところを知らず、赦してやってください」

と。自分が羔（こひつじ）となって罪を負った者だけが罪を赦すことができる。我々は手放しで人を赦すことはできない。キリストに赦されているから人をゆるすことができる。感情的にはできますよ、ゆるすことが。けれども、本当の意味で人をゆるすことの、ゆるす資格はないんです、我々は。資格なき者。だけれども、神さまに、キリストに赦されたから、この赦しをもって人をゆるす。ゆるすばかりでなくて、人を担うことができる、キリストと一緒に。

この「赦してください」と言ったのは、罪を背負ったところの贖いのキリストであるから、愛であるから、この義と愛がこの十字架上で叫ばれているわけです。義は縦の線、愛は横の線、まさに十字架を表している。乾坤（けんこん）を貫くところの神の義の線、神の御意が行なわれる線。人を担っていくところの横の線。この縦と横の、義と愛の線がクロスしている。だから、この救いはここに本当にある。

●肉体が霊化

マルコ伝16章にいきます。

1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、

前に既にキリストにナルドの香油をぶちまけた女性がいる。それは誰だかわからない。けれども、このマグダラのマリヤであるかもしれない。

2一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。

マタイ伝には地震のことが書いてある。28章に、

「**2視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り来りて、かの石を転ばし退け、その上に坐したるなり。3その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。4守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。**」（マタイ28・2～4）

とある。これは地震ではない。霊震です。キリストの霊によってそこの所が揺らいだ。こういう次元はとても凄い。だから、私は霊震という。単なる地震ではない。

3誰か我らの為に墓の入口より石を転ばすべきと語り合いしに、4目を挙ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。

この石は大きな石であったから、普通はなかなか除けるわけにいかなかった。

5墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。

「白き衣を著たる若者」というのは天使のことです。「天の使い」というのは本当にあるんですよ。

いつのクリスマスの集会だったか、非常に著しいクリスマスがあった。その時に並いる人たちの後に白い羽を持った天使が二人ずつ立ってしまった。私の周りに七人の天使がいたそうだ。私は見ない。とにかく、その時は凄いことが起きてしまって、足が悪くて杖をついて来た人が、帰りには杖がいらなくなってしまったり、きれいな幻を見たり、天来の音楽を聞いたり、大変なクリスマスだった。ときたま凄い現象が起きることがある。

6若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦りて、此処に在さず。視よ、納めし処は此処なり。

「甦る」というと、なにか息を吹き返したように思うでしょ。そんなことではない。霊体を、まさに霊生を持っている。キリストは霊生、霊体をもって現れる。肉体が霊化してしまう。

自然科学の物理の世界もすごいけれども、霊的な世界はもっと次元がすごい。私はなにも霊的な人物ではないけれども、じつに簡単に私はそれを受けとる。これは不思議です、この御霊がきたら、聖霊がきたら。私はその世界に入って祈れば、不思議なことが起きるもの。仕方がないよ。お医者さんがびっくりしてしまう。皆さんは、そういう無限無量なものが、空気がくるように霊気が、霊波がやってくる。

「**いずこより来て、いずこへ行くかを知らざるけれども**」

とキリストが言ったが、それは事実なんだ。もうそうなったら、楽でしょうがないですよ、

正直。力む必要はないから。

●もうひとつ奥の世界

それは人間だから、感情の波はあるでしょうよ。けれども、その波の奥の静かな世界。また雲がかかるでしょうよ。しかし、雲を突き抜けた成層圏のところ。その深海や成層圏のようなところにいるようなわけですよ、そこに御霊がくると。

「私の信仰」なんて言ってね、信仰をなにかもったいぶるようなことはもういらなくなる。

「私の信仰はどうだ」

なんて、よしたがいいですよ、この「信仰」なんてものは。

親鸞も言ったでしょ。

「南無阿弥陀仏というのは弥陀の御もよおしによる。自分が言っているのではない。南無阿弥陀仏と言わしめられている。如来の御もよおしによって本願の声として言っているだけのはなしだ」

と。この本願の角度にのるまでは本ものにならない、こっち側からあせっているうちは。始めはいいですよ、あせっても。そして、ぶっ倒れてくださいよ。そうしたらば、上からやって来るから。パウロなんてのは、「あせる」どころではない。反抗していた。そうしたらキリストに、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

とぶっ倒された。アナニヤに按手されたら、

「わが目より鱗のごときもの落ちたり」

と、開眼しました。本当に目が開いた。心眼が開けた。心の眼が開けた。心の眼が開けると、今度は本当の神眼になる。神の眼になる。漢字はおもしろいね、心が神に通ずる。神眼となる。楽しいよ、そうなったら。

イエスみたいな素晴らしい人がですよ、家族や親族の中にいるときには、

「このごろなにか変わってきたな。変なことを言ったりしたりするが」

なんて言われて変わり者にされて、一向本当にキリストの本質が受けとられないから、

「預言者は故里にいれられず」

と、キリストはナザレからガリラヤ湖畔に出て行ってしまった。そんなもんですよ。

「小池先生なんて大したことはない」

と言って出て行ったっていいですよ。大したもののないこの八方破れの中に何があるかを見てくれなければしょうがないよ、いつまでたったって。それでないのがみんな出て行った。躓いたり転んだりした。躓いたり転んだりさせる私も悪いかもしれない。けれども、もうひとつ奥の世界を本当に見れば、

「よし、先生を担いでいきましょう」

というくらいでなくては。私は一人びとりをその角度からいつでも担いであげます。裁きません。

ところが、霊的なんて言っている人たちがまた妙な党派的な、宗派的な根性で疎外したりしている。だから、私は

「孤軍万軍」

なんて言いたくなってしまう。「無教会主義」なんて、教会と対立して「無教会」と言ってダメです。およそ対立の世界はダメなんです。あらゆるイズム、主義主張はみな限界を持っている。主義主張を突き抜けなければダメ。もうひとつ上の世界に、超絶の世界に入らなければ。本ものは「超イズム」（ユーバーイズムス）です。

ゲーテという人がそういう魂だったから、ああいうもの凄い詩人になった。ダンテにしろみんなそうですよ。第一級の人物はみんなそんなところは突き抜けている。ベートーベンにしろ、ロダンにしろ。私はただ芸術家を芸術家として言っているのではない。彼らの人間がそういうところにいるから。だから、『芸術のたましい』（小池辰雄著作集第2巻、1976年刊）を書いたんですよ。「そうだっ」と言って響いてこなければ。そうでしょ。

●円現自在

この越えた世界は、今度は逆に一切を包摂してしまう。私の話はあちらこちらと自在に飛んでしまうから、その響きを受けとってくださいね。

「円」(◯)というのは真理の最高の表現なんです。四角い天体があるかね。天体はみんな丸、球、円形、球形だ。もうそれだけだって素晴らしい真理ではないですか。天文学者になりたいね、正直。なんと素晴らしいか。地球は太陽の周りをグルグル回っている。

円は同時に無限を表している。無限を表現しようと思ったら、どうしても円になってしまう。だから、「円現」という言葉が私は大好きだ。

「円現せよ」

という。聖霊が来なければ、円現の世界には入れない。いわゆる

「私の信仰は、私の神学は」

なんてやっているのでは。

キリストが甦って、霊体をもって現れた。キリストは円現自在なんです。活現自在。霊生活現。霊の生命は活現してやまず。戸が閉まっていても入ってきますよ。ルカ伝に書いてある。

「私は幽霊ではないよ。何か食べるものがあるか」

と。そこに焼き魚があった。それをキリストは食べた。ルカ伝に書いてある。

「へえ～、そんなことがあるんですか」

なんて、怪しんだり疑ったりする。

「そんなことがあるか」
ではない。
「もう参りました！　私はこういう次元には。そういうキリストには参りました」
と言って、さっきの平伏しの中に入る。そうすると、キリストははっきり捕まえてくださる。こんなうれしいことはない。私は偽りませんよ、はっきりそうですから。
どうして、モタモタしているんですか、みんな。もたもたすることはないではないですか。イエスというひとを疑うんですか。キリストというもの凄い次元のひとを疑うんですか。この甦りの生命がいらないんですか。
そういう、甦りのキリストが現れたら、みんなはびっくりしたり疑ったり。我々の普通の現実と同じだよな。使徒たちもなかなかこれを信じない。
マルコ伝14章27節に、
「[27]**イエス弟子たちに言い給う『なんじらは皆躓かん、**
私に躓くよと言う。
それは「われ牧羊者(ひつじかい)を打たん、然らば羊、散るべし」と録されたるなり。
これはゼカリヤ書13章に書いてある。
[28]**然れど我よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに往かん』**」（マルコ14・27～28）
「十字架にかかって、そして現れても、お前たちは信じない」
と。大体、十字架にかかれば、みんな散ってしまう。女の人がそこに少し残ってましたが、弟子どもはダメだよ。男は大体ダメらしいね。女性のほうが純情だから。男はすぐ疑ったり、
「なぜだ、そんなことがあるか」
なんて。そんな有限的な知識でもってそんなこと言ったってダメなんだ。だから、
「**幼児(おさなご)のごとくならずば天国に入れない**」
という。率直に受けとれと。「どう思う、こう思う」もない。
「我思うゆえに我あり」
なんてデカルトは余計なことを言った。
「我ぶっ倒されたるゆえに我立ち上がる」
なんだ。「甦る」という言葉は「立ち上がる」という言葉です。ヘブライ語では「カーム（クーム）」という字です。「彼は甦った」というのは簡単なんだ、「カーム」という。
「彼は立ち上がった」
という字です。ドイツ語の「アウフエァシュテーエン」（復活する）という字がかなりそれに近い。ギリシア語では「甦えらされた」という受身の形です。もちろん、神さまの力で甦えらされたから。キリストは新しく立てしめられた。けれども、それはキリストの中に霊生がきているからです。

●キリストの霊生

7然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言い給いしが如し」『8女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。

まぁ、いろいろですよ、記事は。マルコ伝にはそう書いてある。マタイ伝28章では、

「8女たち懼れと大なる歓喜とをもて、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走りゆく。9視よ、イエス彼らに遇いて『安かれ』

「シャーローム」ですね、

と言い給いたれば、進みゆき、御足を抱きて拝す。

この「御足を抱きて拝す」という言葉があるものだから、ロダンはああいう彫刻をしたんです。ただし、これは復活のキリストの話で、十字架のキリストではない。

10ここにイエス言いたもう『懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼処にて我を見るべきことを知らせよ』」（マタイ28・8～10）

とある。マルコ伝16章9節、

9一週の首の日の払暁、イエス甦りて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、前にイエスが七つの悪鬼を逐いいだし給いし女なり。

いろんな悪霊に囚われていたのをキリストはみんな追い出して救ったわけです。ルカ伝にもマグダラのマリヤのことが書いてある。

10マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。11彼らイエスの活き給える事と、マリヤに見え給いし事とを聞けども信ぜざりき。

信じなかったという。

「それは錯覚だろう。幽霊だろう。マグダラのマリヤは少し精神状態がおかしいから、そんなものを見たんだろう」

なんて。

パウロが、

「死人の甦りがなければ、キリストも甦らなかっただろう」

なんて妙な言い方をした。そうすると、死人の甦りというのが前にあって、キリストもそのサンプルの一つにすぎないなんて、あの言葉はちょっとそういうように響く。

あのパウロの言葉の言い方はそういう論理ではない。キリストの甦りという事実にぶつかった。それは旧約では仮死状態から息を吹き返したような例があるから、それから「甦り」ということも考えられたでしょう。エゼキエル書あたりに復活的な預言もないこともないけれども。キリストは霊体をもって現われた。パウロが言ったように、

「いろんな人に現れて、ついに月足らぬ自分までにも現れた」

と。この「自分に現れた」というのは、ダマスコ途上でパウロが引っくり返されたことです。

「**サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか**」

と。パウロはいわゆる直弟子ではないからね。そういう、キリストの霊体をもって、霊生をもって現れるという、そういう事実がむしろ土台になって、パウロはああいうような言い方をしているんです。そうでないというと、言葉に躓きます。

●霊生活現

だから、

「**キリストがもし霊生をもって甦らなかったら、我らの信仰は空しい**」

という。十字架でもって贖われて、罪から解放されたでしょ。罪からの解放。罪に対して自由となった。囚われなくなった。「罪」というのは「我執」ですよ。自分に囚われることが罪なんですから。我執という言葉が一番よく表している。エゴイズムです。

このエゴイズムから解放されたら、そこは空っぽではないですか、無ではないですか、何も無いではないですか。十字架で私たちは無罪になった。罪が無くなってしまった。無我執になった。無私になった。

あいかわらず、私は有私なんだ。私というのは有る。相対的な人間小池は有私のダメな野郎です。けれども、十字架の贖いを受けているところの根底はこの無私というやつ。これは、この無というのはまさに無者なんだ。

「無者が即無限無量」

ということは、どういうことかというと、聖霊が来るから、甦りの生命がやってくるからです。甦りの生命ということは、

「キリストが甦りました。おしまい」

ではない。

「ああ、うれしいな。そうか、それでは私にも希望ができた」

なんて、それくらいのことではまだダメです。甦りを本当に受けとるには、自分自身が本当に十字架されて――甦りの生命がいかにして来るかということは、もうこれはペンテコステなんです――聖霊が来なければ、甦りの生命にはならない。だから、

「十字架と復活と聖霊は分けるわけにいきません」

と私が言っているのはそのことなんだ。

キリストが、

「この甦りの生命を今に与えるぞ」

と。御霊がくれば、この甦りの生命になる。

「復活のキリストを信ずる」

とは何かというと、キリストが甦ったことを、「はい」と言って受けとることが同時に、

「甦りの生命を自分の中に受けとる」
ことでなければダメ。頭で受けとっているうちはダメ。
「自分の中に受けとる」
とは何かというと、聖霊を受けとらなければ、自分の中に受けとることにならない。そうでしょ。
クリスマスでキリストは降誕したけれども、キリストの降誕を本当に受けとるのは、
「私たちの中にこのナザレのイエスを、このキリストを受けとる」
ということが本当に降誕を祝うことになるのと同じように、復活においても復活の生命を受けとることは、やはり聖霊です。だから、御霊なくしては何ごとも始まらない。いいですね。
ありがたいことに、本当に十字架で贖われたところには、空っぽのところになると、あなた方は、
「南無キリスト！」
と称えれば、この御霊はきます。
「御霊はどんなものですか？」
なんて言われたって、私は知りませんよ。
「これが御霊です」
なんて言えないもの。なにか魂のフワフワしたものかなんて。そんなものではない。
それは来ますから、御霊が。それは祈りがまさに祈入すること、祈り入ることなんです。十字架された、罪が贖われた。そうしたら、
「主さま、南無キリスト！」
と、帰り入る、祈り入る。キリストの中に自分を投げ入れる。そういう祈りの仕方をしてください。そうしたら、聖霊はきている。来ますから、キリストの中に投げ身すると。
投げ身の祈りをしないから、こっち側に坐っていて、なにかお願いしているうちはダメだよ。まず自分が入らなければ、いくらお願いしたってダメなんだ。お願いなら、自分が入ることをお願いすることだ、本当は。
「いや、ぶっ倒れてみたら、じつはキリストの懐の中だった」
というわけですよ。「入る」ことと「ぶっ倒れる」ことは一つなんです、「平伏す」ということと「入る」ことが。何回私は言ったらいいんですかね、このことを。皆さんは本当に受けとっているでしょうね。
あなた方の若いときにこの世界に入ったら、もう大したもんだよ、本当に。早く入ってください。私はやっと50歳になって入ったような間抜けだけれども。それまではそういう祈りを知らなかった。立派な祈りをするんだよ、みんな。頭の祈り、心の祈りです。霊の祈りをしていない。パウロが、

「**霊で祈れ**」

と言っているではないですか。

「**心で祈れ、霊で祈れ**」

という。その霊の祈りを知らない。

私たちが到達するところは、この霊生活現のキリストと共に、いやキリストの中に入って、我々自身が霊生活現のひとにならなければ、この復活節を迎えた意味がない。これでいいということはどこまでもありません。限りなく展開していきます。しかしながら、私みたいなやつを通して、神さまのキリストの霊生が活現してくださるから、私は平伏しながらありがたくてしょうがない。本当だよ。

●使徒的信仰

こないだ私はD中学・高等学校の入学式のときに言いました。

「おめでとう。『お芽出とう』というのは芽が出ること。芽が出て、どんどん伸びていき、茎となり枝をはり葉が生じ花が咲き実が実る。ところが、芽が出るよりも先に根が出る。だから、私は『お根出とう』と言う。

みんなびっくりして聞いていたよ。

根がでなかったらダメだ、根っこのある勉強のしかたを、生活のしかたをしろ。根っこが張るからこそ、どんどん伸びていく。だから、根幹という。幹より根が先です。根幹枝葉花果という。枝葉花果は文化文明の世界。幹は道徳の世界、根は宗教の世界です。根が、宗教がなかったらみんな枯れてしまう。宗教心をもたなければダメだ、人間ではない。

どの宗教を信じろなんて言っているのではない。本来、そのようにつくられているから、その世界にくるまでは、魂は本当の安きを得ない。事実が証明している。私がなにか主観的にものを言っているのではない。皆さんの一人びとりの胸に手をあてて、魂が本当の世界にくるまでは平安がこないことは事実が証明している。

死んでも死なないようなものがありますと言えるためにはこの世界がなかったらダメだ。相対界にいるうちはダメです。絶対なものを相手にするまではダメです。だから、如来でも、キリストでもいいから、とにかく絶対的なものをつかんだやつを相手にしろ。一対一でいけ。その中に飛び込め。それが信である。信仰なんて、ただ仰いでいるのではない。交わる世界だ。その中の世界であって、外からどうのこうの言っている世界ではない。」

と。私はもうはっきり言いました。

ゲーテも、

「宗教の始めの形態は、高きものを拝む。それから、同等なところに現じたものを拝む。

そのあとは、下なるものを拝む。これはキリストがこの下なるものになった。僕となった。エホバの僕。最後は、これが内に入ってくる。内なるもの対する畏敬である。」

と言いました。そのときに、ゲーテは聖霊のことは語らなかったけれども、この「内なるものに対する畏敬」というのは御霊のことです。

この御霊の内住の世界にきたから、

「我を見よ」

と使徒たちが言えた。この内なるキリストがいたから、「我を見よ」と言えた。ペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブはみなそうです。だから、

「使徒的信仰に立ち帰らん。プロテスタントでもカトリックでもないぞ」

と言っている。プロテスタントでもカトリックでも、もちろんこの中に使徒的なひとはいくらでも歴史的にいます。けれども、ただそんな宗派的なことを言っているのではない。

「この元へ帰れ。原始に帰ることが本当の展開である」

ということです。

相手がゲーテであろうと、ダンテであろうと、ドストエフスキーであろうと、カントであろうと、プラトンであろうと、何であろうと読めてしまう。それはこの御霊の光で。最高だもの。

京都の神護寺のお堂の中に大きな曼陀羅（まんだら）が二つ懸かっている。「曼陀羅」というのはやはり「円」を意味する言葉だそうだ。これの原画は空海か誰かが書いたが、原画はもう今はない。その原画を16歳か17歳の少女が見て非常に感激して、

「私はこれを模写しよう」

と。一生かかったですよ。でき上がったときはもうお婆さん。一生を献げてこの曼陀羅を二つ描いた。それが懸かっている。素晴らしいですよ。本当に魂をこめて描いた。生涯をかけてこの二つの曼陀羅を描いて、生涯を献げたです、その少女は。結婚なんかしているひまはない。全くすごい宗教心の没入がなかったら、ああいうものは描けない。技術では絶対にない。

結婚したってしなくたって、再婚したって三婚したって、そんなことはどうでもいいよ。問題は本当に献げるかということ。「使命」というが、私たちは何をしていても本当に神さまに献げているか。私は自分のこの著作集は、神さまに、キリストに献げているつもりで書いている。一銭ももらいませんよ、私は。みんな印刷の方にまわすだけのはなしです。印税なんかひとつももらいません。そういう具合でもって、私たちは神さまに献げる。これは本当の讃美なんです。

いろんなパリサイやなんかがいるから、私は「デバイン・リベンジ」「神聖なる復讐」をしているわけだ。

「仇を返すは我にあり」

と、キリスト(神)が言われた。キリストの霊がしてくださる。人を審く必要はひとつもない。本ものは必ず神さまが評価して守ってくださるから。

●キリストの活現

十字架にかかったキリストが活現して、墓を蹴破って、霊震を起こして、岩盤を引っくり返した。十字架上のキリストが叫べば、至聖所の幕が上から下まで裂けてしまったではないですか。

「旧約宗教はお終いだ」

と。「アウフヘーベン」という言葉があるが、まさにこれを「止揚(しよう)」してしまった。旧約宗教は、モーセの十戒をもう根本精神において全部満たした。十戒以上ですよ、キリストの世界はもちろん。キリストの「山上の大告白」にはモーセの十戒なんかはとてもかなわん。ところが、ユダヤ教はモーセの十戒を金科玉条にして、それにたくさんの誡命や戒律をつけて――人間の人体の骨ほどの数、三六五かなんか知らないけれども――それを拳々服膺(ふくよう)している。

「そんなものではない」

と言うんだ、キリストは。だから、キリストは十字架にかけられた。

どうぞ、このキリスト魂で行こうではないですか。甦りの生命は、本当にアーメン・ハレルヤです。死んでも死なない生命がきている。何がどうなったっていいよ。

「わがうちなるこのキリストの生命をいかんせん」

と、はらわたの底から叫ぶような人にならなければ。それは活現してくださる。それを通してどんな人をも本当に助けてくださる。

癌にかかったっていいよ。癌の奥にもっとすごい力がくるから。絶対に勝っていく。私は聖霊以前は、療養所へ行くと手を消毒したりなんかして、移りはしないかと思った。癩病人なんかに近寄れないと思った。けれども、聖霊がきてからは、もう全然そんな必要はなくなってしまった。こっちから流れていくから。

そうですよ。もう手術もできないような人が立ち上がったりしたではないですか。幾人助けたかね、本当に。脊椎カリエスが治ってみたり。しょうがないよ、キリストがなさるのだから。

皆さんは、本を読んでも、何を見ても何を聞いても、みんなこのキリストの活眼をもって、活耳をもって、見たり聞いたりつかまえたりする。まず楽しくてしょうがないですよ。本もの世界は楽しみが伴う。決して苦しくない。どんな烈しいところを突破しても、そこに今度は逆に歓びがくる。パウロさんがどうですか。牢屋につながれながら、

「喜べ、喜べ」

と言っている。

もう地上の生涯は一遍しかありませんよ。そうしたら本当に神の生命、キリストの生命で突っ走って、天界に

「アーメン・ハレルヤ！」

で飛ぶように行く。そういう人生でありたい。甦りの生命は既にいただいている。

ゲーテが『ファウスト』の始めの方で天使のコーラスで、

「朽ちゆくところの大地の懐の中から

キリストは甦り給うた。

お前たちは喜んで

地上のいろいろな絆を断ち切れ。

キリストを行為をもって誉め讃える人たちに、

「行為をもって」という。讃美は行為をもってする。讃美はただ口ばかりではない。

「行為をもって彼を讃える」

とはどういうことかというと、好意的な行い、即ち、人のために尽くすこと。愛の行為です。愛の行為をもってすることが彼を讃えること。愛の行為をする人たちに、

愛を証明する人たちに、

兄弟の気持をもって人に食物を分け与える者に、

人が困っていたら、さぁ一緒に食べましょうと言って、一つのリンゴを二つに割って一緒に食べる。

福音を宣べ伝えながら旅をする人たちに、

歓びを約束されている人たちに、

そういった人たち、お前たちにキリストという師匠が近くにいるぞ。

今、彼こそはそこに居たもう。」

と。そういう人たちにキリストは近づいていらっしゃる。いや「実にその中に」と言いたい。

「その中にキリストは在りたもう」

と。キリストの霊生を私たち自体が活現して行くのでなかったら、甦りのキリストを迎えたことにならないし、また、そういうように皆さんは本質的に、根源現実において成りつつあることを信じて、聖名を讃えるしだいです。おわります。